

## シーボルト『NIPPON』のフランス語版 : Voyage au Japon

宮崎, 克則  
九州大学総合研究博物館

<https://doi.org/10.15017/15731>

---

出版情報 : 九州大学総合研究博物館研究報告. 6, pp.1-32, 2008-01. The Kyushu University Museum  
バージョン :  
権利関係 :

### 3.『Voyage au Japon』の本文と1841年の広告

ドイツ語版初版の九大本『NIPPON』に残る配本目次の「INHALT」によると、『NIPPON』の本文は以下の7章構成であった。

- 第1章 日本の数理地理と自然地理、海上旅行
- 第2章 民族と国家、陸・海の旅
- 第3章 神話と歴史
- 第4章 技術と学問
- 第5章 日本の神々
- 第6章 農業・工業・工芸および貿易
- 第7章 日本の近隣諸国と保護国

各章の本文は順次第1章から出たわけではなく、シーボルトが整理できた部分から出ている。第1回配本では1・3章の一部。第2回配本では4・7章の一部といった具合である(1)。1・5巻が出たフランス語版本文の各節タイトルを列記すると、

- 第1巻 第1節 バタヴィアから日本までの旅行
- 第2節 平戸と出島、日本におけるオランダの商館
- 第3節 通常行われている宮廷への旅行
- 第4節 1826年の長崎から江戸への旅行
- 第5節 長崎から小倉への旅行
- 第6節 長崎から大村までの旅程の地理・統計
  
- 第5巻 第1節 朝鮮人漁夫の肖像
- 第2節 日本の沿岸に難破した朝鮮人商人との面会
- 第3節 言語と文字
- 第4節 語彙
- 第5節 朝鮮の詩
- 第6節 朝鮮に関する覚書
- 第7節 韃靼国沿岸で難破して北京へ行き、そこから朝鮮を経て故郷に帰った日本の漁夫たちによる報告。日本の書物『朝鮮物語』からの抜粋。
- 第8節 朝鮮王国の制度、高官と廷臣
- 第9節 朝鮮半島史総説
- 第10節 日本の文献に基づく日本と朝鮮半島および中国との交渉
- 第11節 日本の新羅遠征の伝説(西暦200年)
- 第12節 類合、朝鮮語の訳語と朝鮮-中国方言の同等のもの【朝鮮漢字音】がつけられた中国語の語彙、J. ホフマンによる翻訳と改訂

である。これらの節がドイツ語版の何回配本に当たるのか、「INHALT」と照合すると、フランス語版第1巻第1節は4回配本。2節は1回配本。3・4節は5・6回配本。6節は8回配本となる。同じく朝鮮について記した第5巻も2・7・8回配本で配られている。つまり、フランス語版の本文編は、ドイツ語版で8回配本までに出た部分を翻訳しているのである。シーボルトは8回配本までの間に、4章の技術・学問、5章の日本の神々についての本文も出していたが、まだ一部を出したに過ぎず、まわっていなかった。

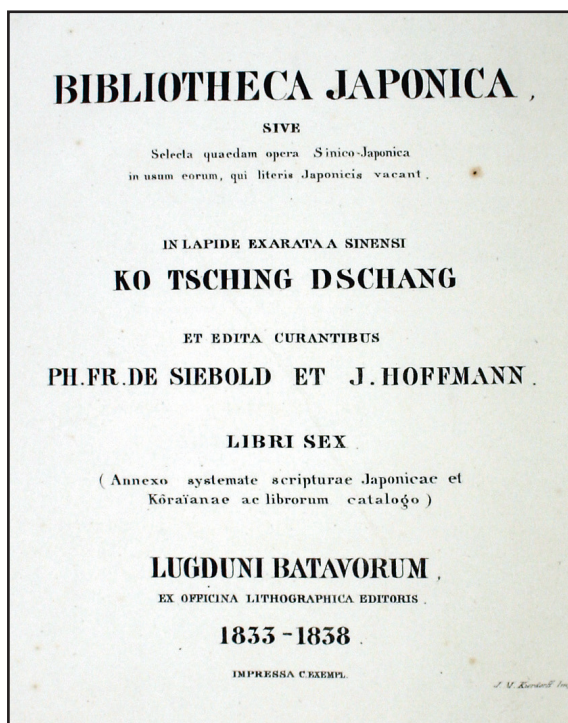
ドイツ語版8回配本の刊行時期は不明ながら、7回配本の「INHALT」に1839年10月と明記されたシーボルトの報告があるので、早くとも1840年頃である。フランス語版もこの時期に刊行されており、ドイツ語版本文のなかで、まとまっていた旅行記と朝鮮についての部分が翻訳され、『Voyage au Japon』として刊行されたのである。配られた図版をみると、本文に関係する絵のみが配られたわけではなく、ドイツ語版用として作られていた図版のなかから全般的に選ばれており、特定の分野に集中していない。そうすることがシーボルトの方針だったのであろうが、本文とあまり関係のない図版編は、異国

趣味を満足させるための図録集のようにになっている。最終的にドイツ語版『NIPPON』では、図版数367枚(うち彩色図版47枚)となるが、フランス語版では71種83枚(うち彩色図版12枚)であった。

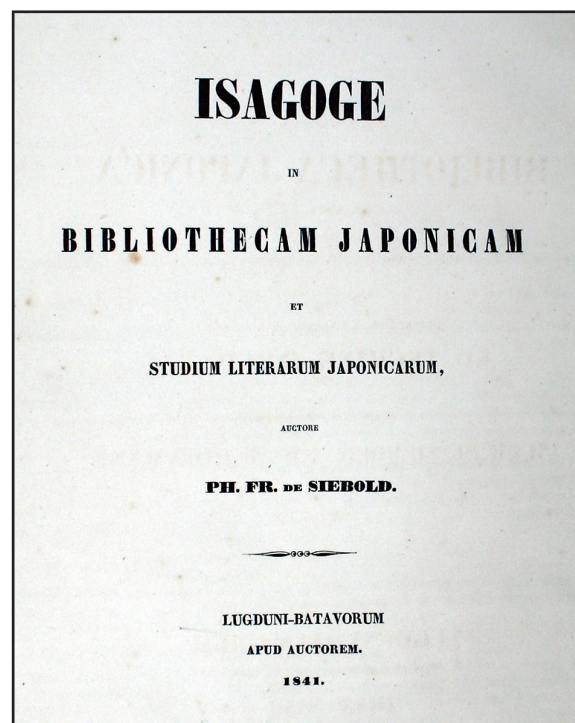
シーボルトは助手の郭成章・ホフマンの協力を得て、1833年～41年にかけて「日本叢書」と総称される6冊の辞書類をオランダのライデンで刊行した。そのなかの1冊が『和漢音訳書言字考』であり、内容説明として「表意文字の新增補珠玉、もしくは順を追って整理編集された日本語の発音の書かれた漢字コレクション」とある。要するに江戸時代の漢和辞典である。漢字の部分は郭成章が担当して石版を作成し、「1835」年の内表紙が付いている。ホフマン担当部分にも内表紙があり、「1833-1838」年とある。そして、それらをまとめてシーボルトが「1841」年の内表紙をつけて刊行した。『NIPPON』と同じく、ライデンのラ・ラウが印刷した1841年刊



郭成章の内表紙 1835年

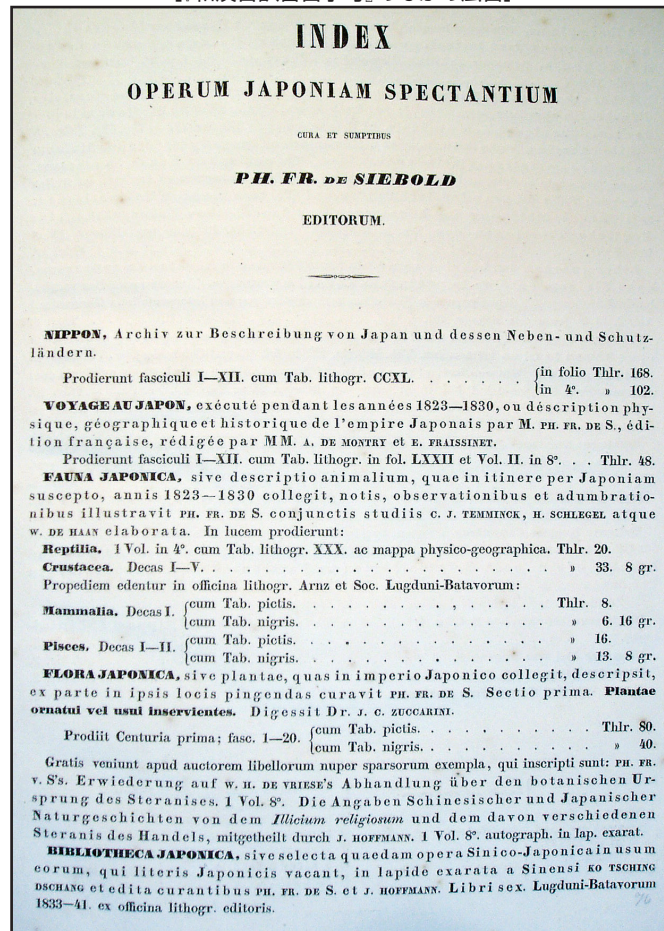


ホフマンの内表紙 1833-1838年



シーボルトの内表紙 1841年

[[和漢音訳書言字考]のなかの広告]



(ドイツ)ボフム大学図書館・長崎歴史文化博物館蔵

『和漢音訳書言字考』には、それまでに刊行した本の広告も載っている。ドイツ語版『NIPPON』の他に、『日本植物誌』(Flora Japonica)、『日本動物誌』(Fauna Japonica)があり、『Voyage au Japon』もある。

[部分拡大図]

**VOYAGE AU JAPON**, exécuté pendant les années 1823—1830, ou description physique, géographique et historique de l'empire Japonais par M. PH. FR. DE S., édition française, rédigée par MM. A. DE MONTRY et E. FRAISSINET.  
 Prodierunt fasciculi I—XII. cum Tab. lithogr. in fol. LXXII et Vol. II. in 8<sup>o</sup>. . . . . Thlr. 48.

『Voyage au Japon』の説明文を要約すると、シーボルトによる1832～30年間の日本に関する風景・地理・歴史の説明。モントリーとフレシネによる翻訳・編集。1～12分冊まで刊行。フォリオ判72枚。8折判の本文編2冊。48ターラー。

これまで検討したように、現存するフランス語版の図版編は12分冊、2折判(フォリオ)の図版数83枚であった。彩色図版12枚は同じ絵を彩色していたので、その分を差し引くと71枚となる。これは広告文にある72枚と異なるが、単純ミスと思われる。フランス語版の各分冊はほぼ6種類7枚の図版を配っていたが、第6分冊のみ1枚少なかった。このことを忘れて6×12分冊と計算した結果であろう。本文編も8折判2冊とあり、現存する本文編と合致する。したがって、『Voyage au Japon』の刊行時期は、すでに図版編2冊が販売されていた予約募集書の1837年10月から、1841年刊『和漢音訳書言字考』以前ということになる。従来、フランス語版の刊行時期は、本文編の内表紙にある年代から1838～40年とされており(2)、それほど大きな違いはない。

販売価格については、1841年までに刊行されていた『NIPPON』2折判(フォリオ)が168ターラー、『Voyage au Japon』

は48ターラーとある。最終的にドイツ語版『NIPPON』の値段は、2折判の色つき版が308ターラー、4折判の色なし廉価版が160ターラーである(3)から、部分訳の『Voyage au Japon』は『NIPPON』に比べるとはるかに安かった。なお、当時の平均的な労働者の年収は120~160ターラーであった(4)。

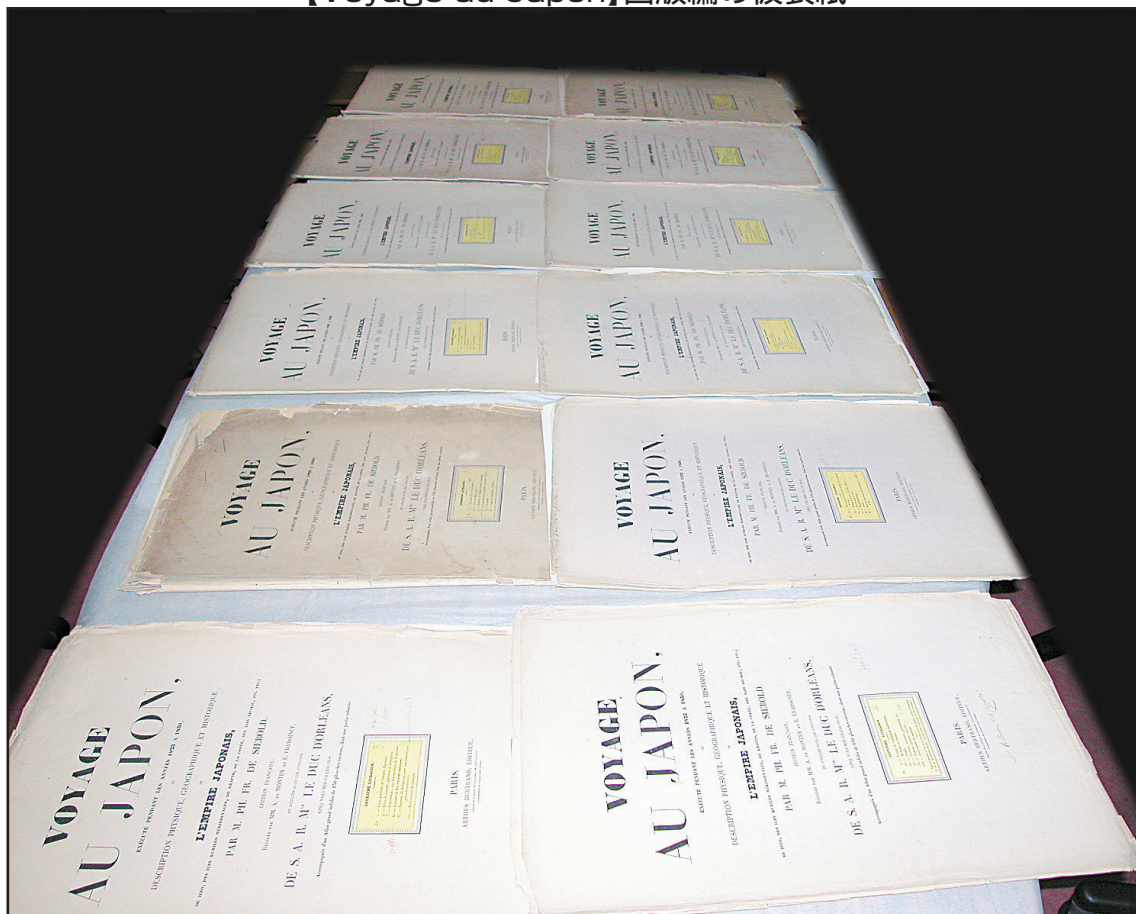
〔注〕

(1)ドイツ語版『NIPPON』の配本については、宮崎克則「復元:シーボルト『NIPPON』の配本」(九州大学総合研究博物館研究報告)3号、2005年)

(2)ハンス・ケルナー(竹内精一訳)『シーボルト父子伝』163頁、創造社、1974年

(3)(4)ヨーゼフ・クライナー「三人のシーボルト」(同氏編『黄昏のドクガワ・ジャパン』、NHKブックス、1998年)

【Voyage au Japon】図版編の仮表紙



シーボルト記念館蔵

## おわりに

「シーボルト事件」によって、いくつかの地図類は幕府に没収されたが(複製を持ち出す)、コレクション全体からみると、さほど支障はなかった。シーボルトは事件最中の1829年2月12日、オランダ・ライデン国立科学博物館長テミンクへ手紙を出した。それには(1)、

私は制限された条件のもとで自然観察や蒐集が日本の学者の伝達や協力という形で進められています。1200冊以上の日本の書物と、医家や自然愛好家から寄せられた下絵、論文などの寄贈、日本全土にいる私の弟子や友人などから送られた翻訳書・口述の報告など。これらの私の収集品のうちで、地理学に関するもの、暮らしや習慣、自然産物の日本語・中国語の名称などに関するものはすべて特別な価値のあるものです。なお日本国の刻印のあるものはさしあたり隠しておかなければなりません。厳重な注意と検閲のもとで私の原稿は送り荷の中に付加することができました。来年になれば、日本蒐集物の概観作成のために、適した興味ある対象物についての完全な抜粋をお知らせできるでしょう。

とある。シーボルトは何度にも分けて収集品を発送しており、国外追放が決定した後の1830年1月出帆のジャワ号には、植物標本・種子・鳥・魚・は虫類・甲殻類の標本12箱、生きた動物と種子22箱、生きた動物6箱、他に39箱の博物資料を積み込んでいる(2)。彼が29年2月15日、バタヴィア総督へ宛てた手紙にも「日本政府の要求は僅かしか満足させず、もっとも重要なものは犠牲にせずに守ってきた」とあるように、重要なコレクションは無事であった(3)。30年7月にオランダへ到着したシーボルトは、収集品の整理を行い、2年後の32年には『NIPPON』の第1分冊を刊行し、33年に『日本動物誌』、35年に『日本植物誌』を刊行し始める。『NIPPON』ドイツ語版では、本文とともに17~20枚ほどの図版が分冊で配られ、1830年代後半頃まではほぼ1年に1回のペースで順調に配本されていた(4)。

日本を主体に周辺地域の歴史・風俗・社会を紹介した『NIPPON』は、それまでにヨーロッパで出ていた日本関係研究書に比べると、圧倒的に図版が多く、これを購入した人々はいまだ未知の国であった日本を容易にイメージすることができたと思われる。シーボルトが自費出版で出したドイツ語版『NIPPON』は好評となり、1837年にはベルTRAN社からフランス語版が出ることとなった。フランス語版の出版には、フランス王の第1王子オルレアン公の援助があったと考えられるが、詳細は不明である。オルレアン公(1810~1842年)は音楽や文学、日本の陶磁器にも興味を持っていたが、32歳の若さで死去している。このためか、フランス語版は予約募集書の通りでなく、途中で終わっている。

以下、フランス語版の特徴をまとめると、

- 1)ドイツ語版の部分訳である。
- 2)本文の1巻・5巻は1840年頃までに出たドイツ語版のなかでまとまっていた部分を翻訳している。
- 3)図版作成にはドイツ語版で使用した石版を再利用している(一部は新調)。
- 4)ドイツ語版の13回配本(1851年)で配られる図版が、約10年前にフランス語版として配本されている(シーボルトは、図版をある程度まとめて作成したことになる)。
- 5)フランス語版の本文と図版83枚に関連性はあまりない。

今のところ、フランス人たちのエキゾティシズムを満足させたであろう『Voyage au Japon』が、どれほど売れたのか不明である。

## 〔注〕

- (1) 酒井恒・ホルサイス『シーボルトと日本動物誌』252頁、学術出版会、1990年
- (2) (3) 永積洋子『ドイツ人シーボルトとオランダ学界』(石山禎一他編『新・シーボルト研究』II、八坂書房、2003年)
- (4) 宮崎克則『復元:シーボルト『NIPPON』の配本』(『九州大学総合研究博物館研究報告』3号、2005年)